

『人々が集い、つながり、夢が広がる

りんご並木の心が息づく結いのまち・いいだ』

20年後の賑わう中心市街地への市民提案 Ver-2,2

平成31年3月19日

中心市街地を考える会

〔 特定非営利活動法人いいだ応援ネットイデア
南信州アルプスフォーラム 〕

目 次

| | |
|----------------------------------|----|
| 〈はじめに〉 20年後の「なりたい未来」「あるべき姿」を創造する | P2 |
| 1. 新しい中心市街地の創造 | P3 |
| 2. 中心市街地の将来像 | |
| 1)リニア中央新幹線駅とのアクセスと交通利便性の確保 | P3 |
| 2)まちなかMICEと賑わいの創出 | P4 |
| 3)タウンキャンパス～学びのまち | P7 |
| 〈おわりに〉 | P9 |

<はじめに>

20年後の「なりたい未来」「あるべき姿」を創造する

8年後に開業するリニア中央新幹線は飯田下伊那の地域を大きく変える100年に一度の出来事です。どのような影響が飯田下伊那にあるのか、人々の気持ちがどのように変わるのか、まだ誰も正確にリニア後の飯田市を予想できていないのが現実です。飯田市がリニア中央新幹線によりメガポリスの東京や名古屋の近郊として結ばれることは、大いなるチャンスであると同時に、私たちは、大都会（＝大資本）の波に溺れないように、大都会に素通りされないように、でき得る限りの準備をする必要があります。

これまで飯田市では5年区切りの計画により中心市街地のまちづくりをして来ました。いわゆる「積み上げ式」の手法であり、現状を把握した上で問題点や足りない部分を抽出し、改善を施して来ました。これは一定の成果を出し、全般においては飯田らしい地に足の付いた方法であったとも言えます。

しかし、リニア時代は全く様相が異なります。それは前述したとおり、飯田市が東京や名古屋の一部（いわゆるスーパーメガリージョン）として機能し始めるからです。私たちが“地方人”という言葉に甘えていられる時代はもはや過ぎ去ってしまいました。地元の実情だけで都市計画を考えるチームは終わりを告げております。私たちは、リニア中央新幹線開通を踏まえ、地方人でありながら、“都会人”の感覚や思考、嗜好を持ち合わせる必要があります。これからのまちづくりにもそれらを反映していかなければなりません。ただし、都会と同じ土俵で戦うことや、都会にあるものをこの地に欲することはリニアの時間距離を考えると徒労と言えます。この地にあるヒト（人情）、モノ（地形、自然）、コト（技、暮らし）、そしてジョウホウ（伝統、伝聞、歴史）を最大限活かす考え方を明確にしなければなりません。

また、中心市街地だけを見るのではなく、飯田市全体からの中心市街地の役割、中心拠点と地域拠点の連携による飯田市の明るい未来を描き出すことが求められます。

私たちは過去の提言を振り返り、知恵や知識、アイデアを持ち寄って、今の私たちが可能な限りの創造をし、20年後の飯田市中心市街地の「なりたい未来」を、「あるべき姿」を考えてみました。飯田市中心市街地のまちづくりの羅針盤となることを願うものです。

1. 新しい中心市街地の創造

飯田市は合併により多くの地域から構成される市となりました。それぞれの地域にはそれぞれの役割や個性があります。飯田市の中心市街地はまさしく飯田市の核として、その役割を果たさなければなりません。

顧みるに戦後のモータリゼーションの到来とそれに伴う住宅地の郊外化は、農地を宅地化し、街を広げ、学校の郊外移転をもたらし、モータリゼーションに対応が簡単ではなかった地方都市の中心市街地を疲弊させました。もちろん、飯田市も例外に漏れず、中心市街地は人通りが激減し、商店街はシャッター街とも言える状態と化しました。

しかし、飯田市の中心市街地は2つ大きな転換期を迎えており、この危機を好機に替えていくことができます。1つは人口減少に伴い、拡張した街を集約するコンパクトシティ化の流れであり、もう1つはリニア中央新幹線の開通です。

ここで私たちは、新しい目で中心市街地の意義を考え、その機能を再構築し、将来的に継続して機能する中心市街地を創造しました。

2. 中心市街地の将来像

私たちの考える将来像について、地図にプロットした内容を個々に説明します。

1) リニア中央新幹線駅とのアクセスと交通利便性の確保

a) リニア長野県駅と中心市街地を直接結ぶ専用交通線の設置

リニア長野県駅に直結した専用交通線を設け、リニア駅から中心市街地へのアクセスを確保する。具体的な交通手段として、自動運転バスが考えられる。

専用交通線は、新アリーナへも直結させ、アリーナ来場者のアフター利用、新アリーナと中心市街地のまちなかMICEとの連携を可能とする。

b) リニアトランジット機能の確保と伊那谷の紹介

専用交通線と接続した中心市街地における飯田の玄関口として、JR飯田駅前に公共交通のターミナルを設け、リニア駅との、地域拠点との、中心市街地内への交通の結節点として位置づけ、交通の利便性を確保する。

駅前ターミナルに近接して、新しく複合施設を設ける。専用交通線の利用者が駅前で降車することを想定し、地域市民の利用も考慮して、伊那谷を紹介する「伊那谷暮らし館」、地元企業が参画する「物産館」、市民を対象として買い物の利便性を確保する「まちなかマルシェ」、新飯田文化会館と連動した市民向け「文化施設」の機能を合わせ持った複合施設を設ける。

c) 中心市街地への新交通システムの導入

中心市街地とリニア駅とのアクセスに加え、中心市街地内の移動手段として、自動運転等の新しいテクノロジーを先進的に取り入れた新交通システムを導入する。その為に必要な5G環境等の整備も同時に行う。来訪者、住民、勤労者、学生など全ての人にとっての移動の利便性を確保する。

d) 来訪者用駐車場「通り町A I パーキングアベニュー」(仮称)の設置

商店・企業、まちなかイベント、新飯田文化会館、飯田市立中央図書館、飯田市立美術博物館などへ用事がある人々や、観光に来られた方が気軽に駐車可能とする為に、通り町4丁目から主税町まで、中央分離帯側両側に駐車帯を設置する。現在の4車線道路の内、2車線を駐車帯とするのでローコストで効果的な改修工事で実現できる。

駐車帯には、以下の利用、機能を考える。

- ・ 1～2時間無料。以後はA I 技術により電子課金される。
- ・ EV 車用の充電も有料で可能
- ・ 自動運転時代の設備も拡張できる構造とする。
- ・ 中央分離帯に歩道を設け、利用者は横断歩道を渡って両側の歩道へ移動する。駐車帯から歩道への直接の横断は禁止する。

駐車利便性の高い場所がまちの真ん中に生まれることにより、空き地や空き家のリノベーションや事業所の立地等、これまで駐車場併設がネックになっていたきめ細かな活用が進めやすくなる。

2) まちなかM I C E と賑わいの創出

a) 飯田下伊那の文化の中心となる新飯田文化会館(仮称)の駅前誘致

JR飯田駅前に新飯田文化会館を設置し、市民が「観る・創る・参加する」文化のハブ施設として、街の楽しさ、ときめき、連続性を生み出す拠点として位置づけ、以下の機能を設ける。

- ・ 大・中・小のホールを設ける。
- ・ 演奏や鑑賞するだけでなく、録音スタジオや撮影スタジオとして活用することで創造の場にもなる。
- ・ 会館内の施設は市民交流の場として常時利用できる。

さらに、アクセス面について、以下の機能を設ける

- ・ 駐車場は駅を挟んだ西口側に設置し、文化会館とはベデストリアンデッキ(歩行者専用的高架建築物)で結ぶ。

- ・ JR飯田駅の西口としての機能を併設する。
- ・ 飯田線との連携による地域拠点からのアクセスを改善する。

b) 緑の公園軸「りんご並木・桜並木」

『通り町A | パーキングアベニュー』は中心市街地を縦に結ぶ車利用の利便性を高める軸線とするのに対し、りんご並木から桜並木は車の通行を規制した細長い公園軸線と位置づける。特徴ある軸線が中心市街地を縦横に結び、魅力と利便性を高め、飯田の顔となる。

りんご並木～桜並木で形成される緑の公園軸は、四季の広場・飯田動物園・通り町・結の広場・リニア駅からの専用交通線・大宮諏訪神社をつなぎ、各種イベント（週末シードルガーデン、まちなかマルシェ、まちなかファーム、まちなかキッチン）や、文化活動、お祭り、交流の場所等の中心市街地らしい華やかな雰囲気を生み出し、まちなか観光の拠点となっていく。

また、りんご並木の心はまちづくりの原点でもあり、市民の心のこもった日本一の並木通りとして育てていく。

c) 結いの広場

飯田市公民館、プール跡地、中央公園、可能であればNTTを含めたエリアを結いの広場として活用する。

結いの広場には、「スポーツ健康センター」「コンベンション・ガーデン」が併設され、市民活動の礎として位置づけ、街の複合的な活性化を図る。

i) スポーツ健康センター

市民の健康を主眼にした施設で、長寿時代を健康で楽しく過ごしていける指導的な場となる。また、市民活動の場としても利用される。

ii) コンベンション・ガーデン

プール跡地に設ける美しい曲線をもった屋根を有した屋外催事場で、魅力的な空間は飯田の文化的高さを象徴する。

これら施設ができることにより、晴天の時は本部などのバックオフィスとして、雨天の場合は代替会場となり、「中心市街地でなら確実にイベントが行える」という安心感が広がり、りんご並木やさくら並木などでの野外イベントが活発化し、さらに街中でのイベントが活性化する。

d) 集いの拠点（ミニマム・ベース）

街の魅力は「人々が出会い、人々が交流する場」に容易になり得るところにあり、これが「まちなかM I C E」の根幹である。そうした魅力を生み出す為に空き店舗・空き家・空き地をリノベーションし、創造的利用を促進し、居心地のいい空間を創り上げる。

特に空き家や店をやめた店舗併用住宅等は、居住部分をコンパクトにすることで活用スペースを生み出すという飯田なりの手法をシステム化する。

通り町A I パーキングアベニューができることによって、駐車場問題でこれまで活用できなかった裏界線沿いや、駐車場が無い空き家も積極的に活用できるようになる。

「集いの拠点」の運営は、やる気のあるプレイヤーが費用を掛けず行えるようなくみを用いる。特に若者の参加が中心市街地の活性化には必須であり、街中で自分のやりたい事ができる希望が街を元気にしていく。ニッチなジャンルの店舗が生まれることで、街に面白みが生まれ、多層で多重な交流が生み出されていき、既存店舗においても、利用していなかったスペースを街角図書館やフリースペースなどとして活用が始まるなど、面白みが加速する。

また、用事がなくても人々と交流しまちなかの時間を楽しめる場所や、大人の目が届く場所で安心して勉強ができたりする場所等は、今後の中心市街地の過ごし方として注目したい。

e) バックアップオフィスと事業所・企業の立地の促進と情報インフラの整備

南海トラフ地震の発生が予測される現在、国の中枢機能のバックアップが求められている。「リニア新幹線駅と直接結ばれた専用交通線」によって都市部と一体となった中心市街地はその役割を担うことができる。飯田市中心市街地は歴史的に地震による災害にあったことはなく、バックアップオフィスには最適である。このことは、東京に本社を構える大企業にも同様にあてはまる。

J R飯田駅西口側にバックアップオフィスの集積を造り、また昼間の人口を増やすために中心市街地へのサテライトオフィスの集積を含めた事業所・企業の立地を呼び込む。

オフィス機能の為に、情報インフラの整備が必須となる。W i - F i や5 G の環境を中心市街地に整備する。

3) タウンキャンパス～学びのまち

中心市街地全体を教育の場として、先進的な学校教育から、地域にある施設や歴史を活かした社会教育、生涯教育まで展開するタウンキャンパスとして位置づける。先に述べた新飯田文化会館とまちなかMICE、駅前複合施設もその機能の一翼を担う。

a) 自然史博物館と風越山のフィールドワーク

i) 観光スポット「風越山」

「リニア新幹線駅と直接結ばれた専用交通線」は飯田市の象徴・風越山を観光スポットに変える可能性を高める。風越山への信仰の道を登り、天竜川が底に流れる日本一の谷を、そして南アルプスを見渡せる絶景のビューポイントとして、東京近郊住民のハイキングコースとなっている高尾山のように、風越山も東京や名古屋から気軽に登山やハイキングを楽しめる観光スポットとなる。郊戸八幡宮、白山社（奥宮、里宮）を基軸に、かざこしこどもの森公園、今宮球場を含めた展開を想定する。

「風越山コース」「虚空蔵コース」「子供の森公園コース」など、来場者が自分の体力にあわせて選べる登山・ハイキングコースを各種用意する。

ii) 自然史博物館

旧飯田文化会館跡地に自然史博物館を計画し、飯田下伊那の自然と暮らし、歴史を学べる常設展示を行う。特に奥深い南アルプスや、自然と共に生きる知恵を持つ伊那谷の人々の暮らしは、日本人の生きてきた証を現代に残し、リニア時代最大の観光資源と言える。ここで紹介してから、実際のフィールドに向かう流れができる。

館内には、風越山登山のベース施設として、更衣室、浴場、売店、案内所などを設ける。また、リニア駅との専用交通線は飯田駅を經由しての自然史博物館までの直通コースが用意される。車での来訪も考え、駐車場を用意する。

iii) フリークライミング施設

自然史博物館敷地内には屋内フリークライミング設備が設けられ、初心者から国際基準までのコースが用意され、国際大会も可能な施設とする。日本全国から競技者が集まる一方、初心者にはインストラクターが指導を行う体制を整える。

b) 市民活動による教育、文化創造拠点と飯田城の活用

中央図書館、美術博物館に、追手町小学校、消費生活センターの活用を加えて、市民の教育、文化活動の拠点とする。

中心市街地の交通の利便性が向上することにより、中央図書館、美術博物館の利用率が飛躍的に伸びることが見込め、これまで見られなかった文化的な市民活動が多種多様に行われるようになる。

飯田城の史跡を活用した歴史的な城下町としての市民教育、観光の取り組みを行うと共に、VR技術で飯田城を再現、最終的には飯田城の復活を目指す。

c) 学びの広場

少子化は戦後教育の中で組み立てられてきた教育の在り方を考え直すきっかけとなっている。一つには、学校の統廃合であり、もう一つには、小中高における学力の全国的な格差の解消である。リニア時代を迎える飯田市では、東京や名古屋の周辺地域という時間的な立地を踏まえながら、地元にいながら一流大学や本格的なクリエイターを目指せるチャンスを生かせるためのハイレベルな教育の機会を中心市街地に設ける。

その一つが、小中一貫校、中高一貫校、小中高一貫校という一貫教育機関の開設である。そこではハイレベルな教育を行うと共に、地域拠点や企業とも連携したフィールドワークを取り入れた教育を行う。

また、その学校には公共性を持たせ、市民がキャンパスを日常的に使えるようにし、街と融合した学校にする。

d) 寺町散策と歴史の街並み

古い町並みが残り、歴史のある寺院が集積している橋北地区は、こうした歴史的なインフラを活かし、寺町巡りのまちなか観光などのスポットに育てていく。また、伝統的町並みへのリノベーションを行い、空き家や空き地を活用し、歴史を感じる地区にする

また、福祉施設が多いこの地区では、生活に密着した暮らしの充実をはかる施設を中心に据える。

e) 福祉と暮らしの観光再整備

大宮神社を有する東野地区では、東野の大獅子に代表される伝統を守り、中心市街地における神事を中心地区となる。橋南・橋北地区でのお練り祭りの山車や本屋台の復活への取り組みも連携して進める。

また、公園通りとして再整備する桜並木は、りんご並木から大宮諏訪神社をつなぐ公園軸線として快適な都市環境を生み出し、オフィスや住居が絶妙に混在した“住みたくなる”地区として、空き家をリノベーションしてオフィスが設けられて、多種多様な業種が混在する地区となる。

f) 四季の広場と動物園

全国的にもきわめてユニークな市内動物園が更にグレードアップされ、四季の広場まで拡張され、動物たちの運動コースが造られる。散歩時間になると動物たちが歩く様子を多くの人達が見に来る。

〈おわりに〉

1999年、ピーター・カルソープは飯田市のまちづくりの指針として“NEXT100～サステイナブルタウンの創造『住み続けられるまちの再生』”を発表しました。約20年前の提案書は今や預言書とも感じられるもので、その内容を振り返りたいと思います。

[中心市街地とは]

- ・江戸時代から飯田城を中心にした小高い丘の上に城下町が整備された。
この地方の政治、経済、文化の中心として重要な役割を果たしてきて、人々は親しみを込めて“山都”と呼んでいる。

[中心市街地が抱える構造的な問題点] ⇒ 現在はどのように

- ・道路のつながりが悪い ⇒ 羽場、大瀬木線の開通間近
- ・駐車場が少なすぎる ⇒ 相変わらず（主要施設の郊外化の要因）
- ・電車の衰退 ⇒ リニアの開業と公共交通の整備が期待される
- ・商店街が多すぎる ⇒ 各街の個性化以前にシャッター街化
- ・公共施設の分散化 ⇒ 分散したまま
- ・何かが起きるかもしれない期待感 ⇒ 若者の参加意識が生まれる仕掛けが必要
- ・安全で快適に住み続けられる街 ⇒ 日用品の買い物弱者化が進展
- ・街に流動性が無い ⇒ 空き家、空き地利用が進まない。

20年前の提案が、その後の20年間のまちづくりに連続性として活かされているかを、私達は冷静に分析した上で、今後の20年間のまちづくりの指針を提案します。中心市街地は地域拠点に比較して個性が強いのかもかもしれませんが、飯田市の顔となる中心市街地と、深い文化や伝統の上で伊那谷の豊かな暮らしが溢れる地域拠点が連携し、役割分担することにより、リニア時代の豊かな飯田下伊那が表現できると考えます。

さて、今までのまちづくり論議は多くの意見を集めての積み上げ型で行われて来ました。しかし、意見を集約すればするほど内容は凡庸になります。科学的な立証法では、まず専門家による仮説があり、実験によりそれを確かめていく方法が採られます。確かな方向性があるからこそ、実験中の発見で新たな物証も見つかっていきます。今回の提案も、飯田をよく知り、中心市街地を愛するメンバーによる科学的な立証法での〈仮説〉であると共に、リニア時代への危機感を表しております。

長い時間の経過の中では、今回の提案の場所の一つ一つは必ず更新時期を迎えます。その時に行き当たりばったりで整備してしまうのではなく、将来の方向性を共有して連続性を持ちながら整備していくことで、確かな街の将来を築いていくことができると考えます。

多くの方々に、この仮説を共有していただき、時代の変化の中でさらにブラッシュアップして行ける事を期待しております。

※ピーター・カルソープは アメリカ合衆国のサンフランシスコベースの建築家、都市デザイナー、都市プランナー。彼はニューアーバニズム理論の先駆で持続可能な建築の実践を推進し、1992年に形成されたシカゴベースでのニューアーバニズム推奨団体の創設メンバーである。

